

## ●伝染性紅斑

平成26年の伝染性紅斑の報告数は691例で、前年の347例から344例、99.1%増加した。小児科・眼科定点報告対象13疾患総報告数134,809例の0.5%であった。定点あたりの報告数は年平均0.07で、対象疾患中第11位であった。全国集計では32,352例で、前年の10,115例から220%の増加を認めた。対象13疾患報告数2,056,510例の1.6%を占め、定点あたりでは年平均0.20の報告があり、第11位であった。

大阪府における週別の定点あたり報告数については、年間最高値は第47週、50週、52週の0.16で、最小値は第1週の0.00であった。年間を通じて目立った増減は特に認められなかったが、47週から6週続いて0.10を超えた。全国集計の定点あたり報告数では、第50週の0.42が年間最高値で、最低値は第1週の0.03であった。

月別の患者報告状況を見ると、12月が107例と最も多く、次いで11月の89例、6月88例の順であった。全国集計では、6月が4,832例と最も多く、次いで12月の4,498例、7月3,488例であった。伝染性紅斑は、例年春から夏に増加傾向を認めているが、本年は大阪府、全国集計ともに11月から12月にも増加傾向が見られた。

過去10年間の全国報告数では、平成23年が87,010例と最も多かったが、翌24年は20,966例と著しく減少し、25年は過去10年間で最低の10,115例となっていた。26年は3年ぶりの増加であった。過去の発生動向で、19年に78,938例という比較的大規模の流行があったが、翌20年は19,257例、21年は17,281例と2年続けて減少し、22年に50,061例と3年ぶりに増加し翌23年の87,010例へ続いた。経年的にみると、本疾患は3-4年くらいの周期で流行する傾向がみられ、27年は注意が必要であると考えられる。

年齢別報告数では、前年と同様に5歳の105例が最も多く15.2%を占め、4歳104例、6歳の81例と続いている。3歳から8歳までの年齢層で481例の報告があり、全体の69.6%を占めた。20以上の成人例は6例で0.9%と僅少であり、例年通り幼児期から学童期が好発年齢であった。

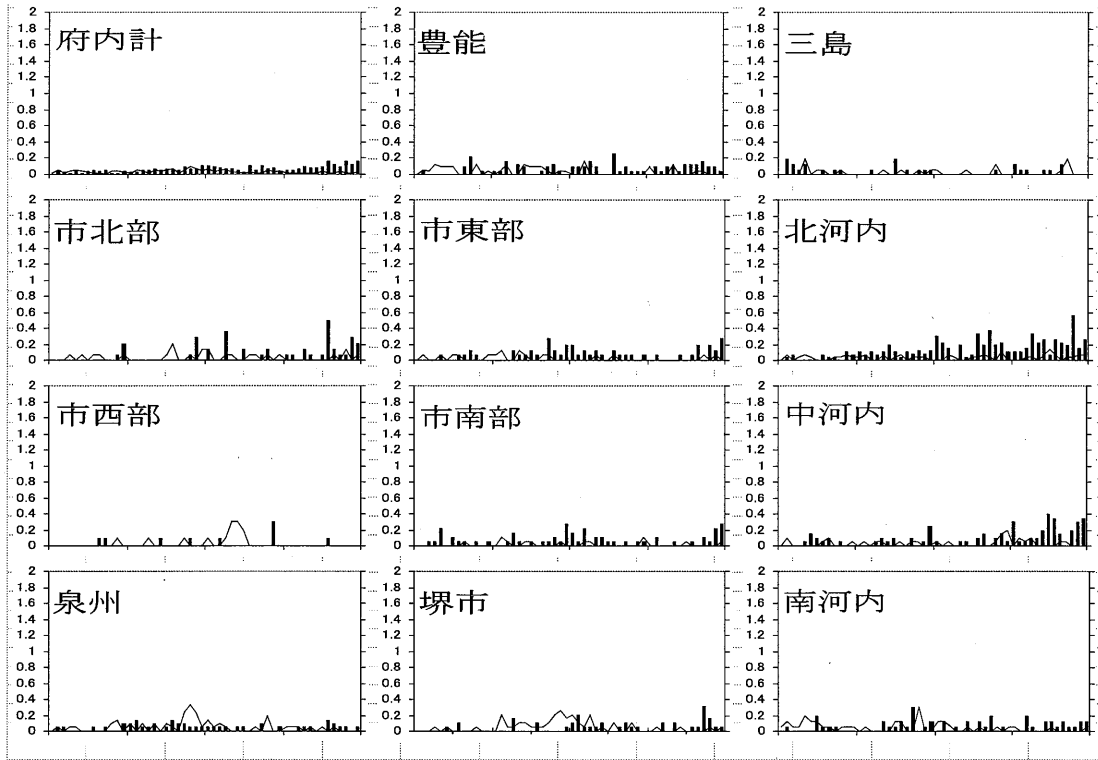
ブロック別の年間平均報告数を定点あたりで見ると、③北河内0.13、④中河内0.09、⑩大阪市東部と⑪大阪市南部が0.07、①豊能、⑤南河内、⑧大阪市北部が0.06、⑥堺市と⑦泉州が0.04、②三島0.03、⑨大阪市西部0.02の順であった。年間最高値は③北河内の50週の0.56であった。

(文責：廣川)

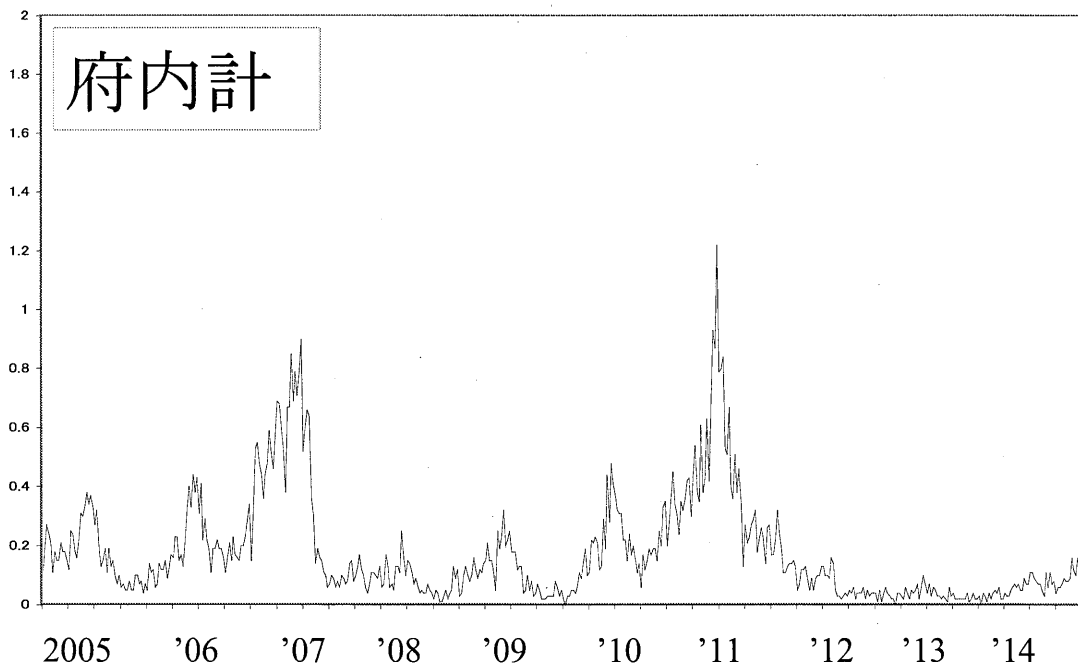
# 伝染性紅斑

線 (H25年第1週～第52週)

棒 (H26年第1週～第52週)



線 (H17年第1週～H26年第52週)



●突発性発しん

平成26年と平成25年の患者報告数の比較では、平成26年の報告数は前年比2.5%増の5,541例で、総報告数の4.1%を占めた。定点あたりの報告数の年平均は0.54で順位は第7位であった。

全国的には第6位(0.54)であった。

月別(週別)の定点あたりの報告数の推移では、定点あたりの報告数は、毎月の平均でみると、7月(第28～31週)が0.67、8月(第32～35週)が0.62と高く、3月(第10～14週)が0.39、2月(第6～9週)が0.39、1月(第1～5週)が0.39と低値であった。

全国的には6月(第23～27週)が0.68、7月(第28～31週)が0.62、5月(第19～22週)が0.62と高く、1月(第1～5週)が0.4、2月(第6～9週)が0.4、3月(第10～14週)が0.44と低値であった。

年齢別患者発生数では1歳の2,728例(49.2%)が最も多く、0歳が2,275例(41.1%)、2歳443例(8.0%)であり、0歳と1歳で全体の90.3%、2歳を含めると98.3%を占めた。

ブロック別患者発生数では、定点あたりのブロック別年平均報告数の上位5ブロックは④中河内(0.82)、③北河内(0.7)、⑤南河内(0.67)、⑦泉州(0.6)、⑧大阪市北部(0.54)の順であった。下位は⑥堺(0.29)、②三島(0.3)、⑩大阪市東部(0.36)であり、上位のブロックとは約2倍の差がある。

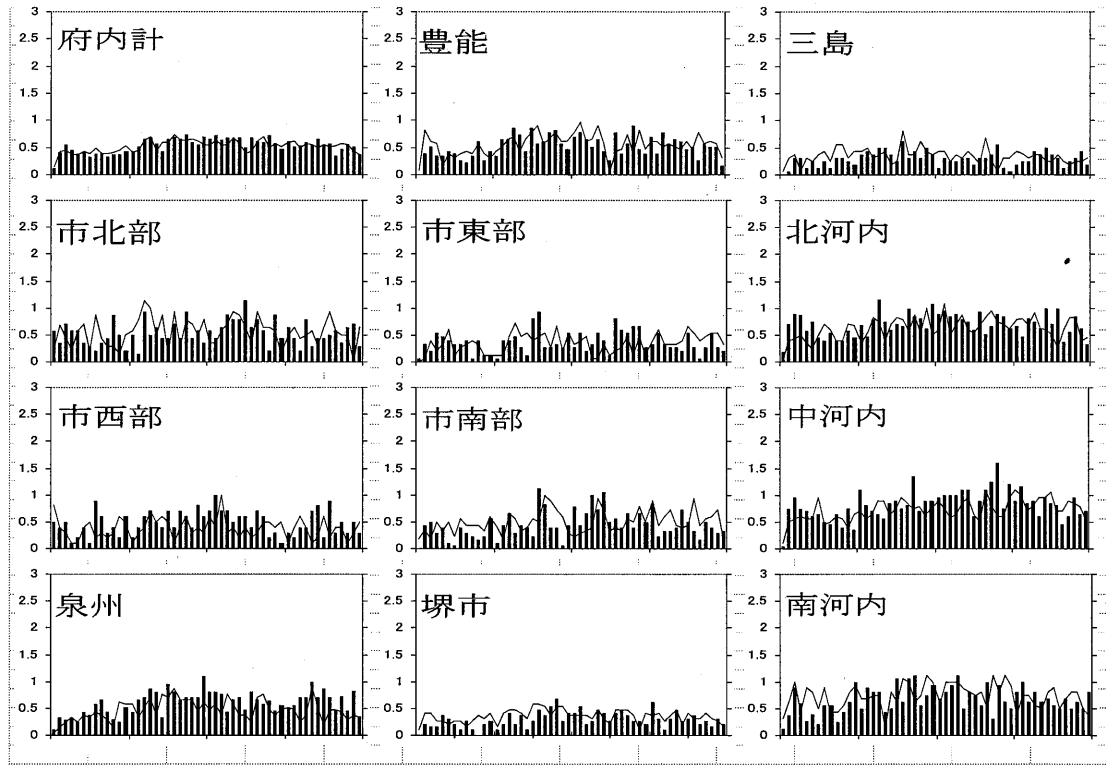
本疾患の特性としてブロック間の差が比較的生じにくいと考えられているが、上位と下位では約2倍の差があり、この傾向は過去のデータと同じである。

(文責：東野)

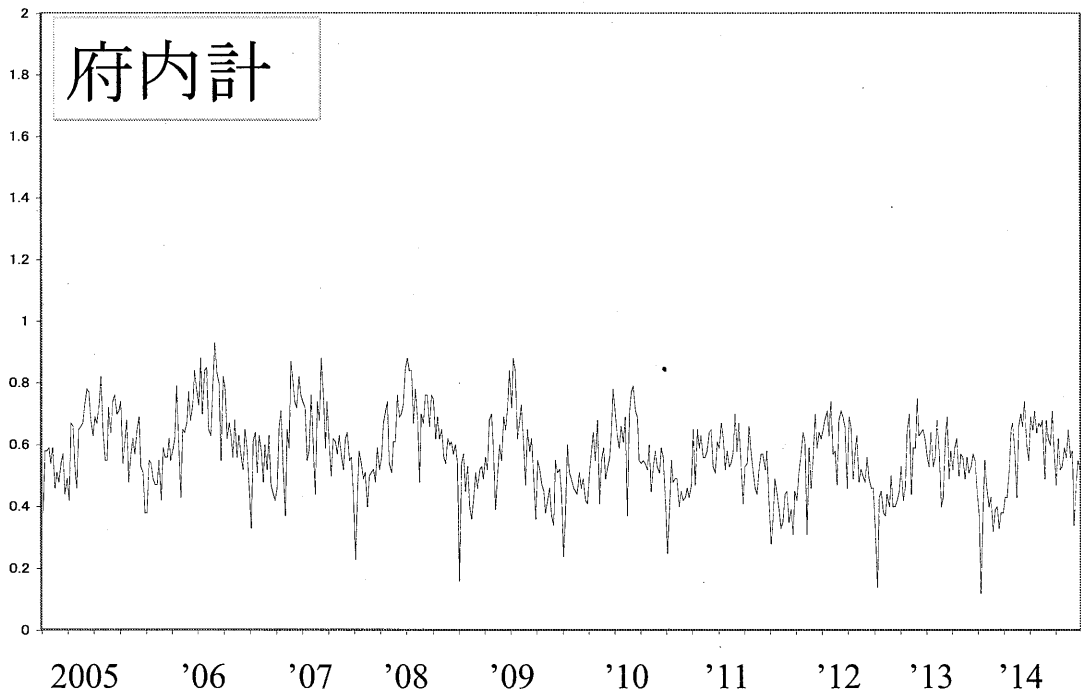
# 突発性発しん

線 (H25年第1週～第52週)

棒 (H26年第1週～第52週)



線 (H17年第1週～H26年第52週)



## ●百日咳

平成26年の百日咳の報告数は171例（定点あたり報告数0.02）で、前年の178例（定点あたり報告数0.02）に比して3.9%減であった。全国集計における報告数は2,066例（定点あたり報告数0.01）で、前年の1,662例（定点あたり報告数0.01）から24.3%増となった。全国、大阪府ともに、小児科定点把握11疾患のうち最も報告数の少ない疾患であった。

全国の報告数は平成10年代半ばには1,000例台（定点あたり報告数0.01）であったが、平成19年より増加し、平成20年には6,686例（定点あたり報告数0.04）となり、24年の4,087例（定点あたり報告数0.03）まで高い報告数が続いた。平成25年は1,662例（定点あたり報告数0.01）、平成26年は2,066例（定点あたり報告数0.01）であり、増加前の平成10年代半ばと同水準である。大阪府の報告数も同様で、平成18年は141例であったが、平成19年から24年までは247例から364例のあいだを推移していた。平成25年の報告数178例、平成26年の171例は全国同様、平成10年代半ばと同水準である。

週別の報告数で見ると、4月の報告数（週平均5.5例）が最も多く、5月（同5.0例）、7月（同3.75例）と続く。逆に少ないのは11月（同0.75例）、2月（同2.0例）、9月（同2.2例）であった。

年齢別では、乳幼児に多く、6ヶ月未満17.5%（30例）、6ヶ月以上12ヶ月未満14.0%（24例）、1歳児14.0%（24例）の報告があった。2歳未満の患者が報告数の45.6%を占めている。20歳以上の報告数は19.3%（33例）であり、昨年の32.6%（58例）からは減少したものの依然として多く、本疾患が子どもだけの病気でないことに注意する必要がある。

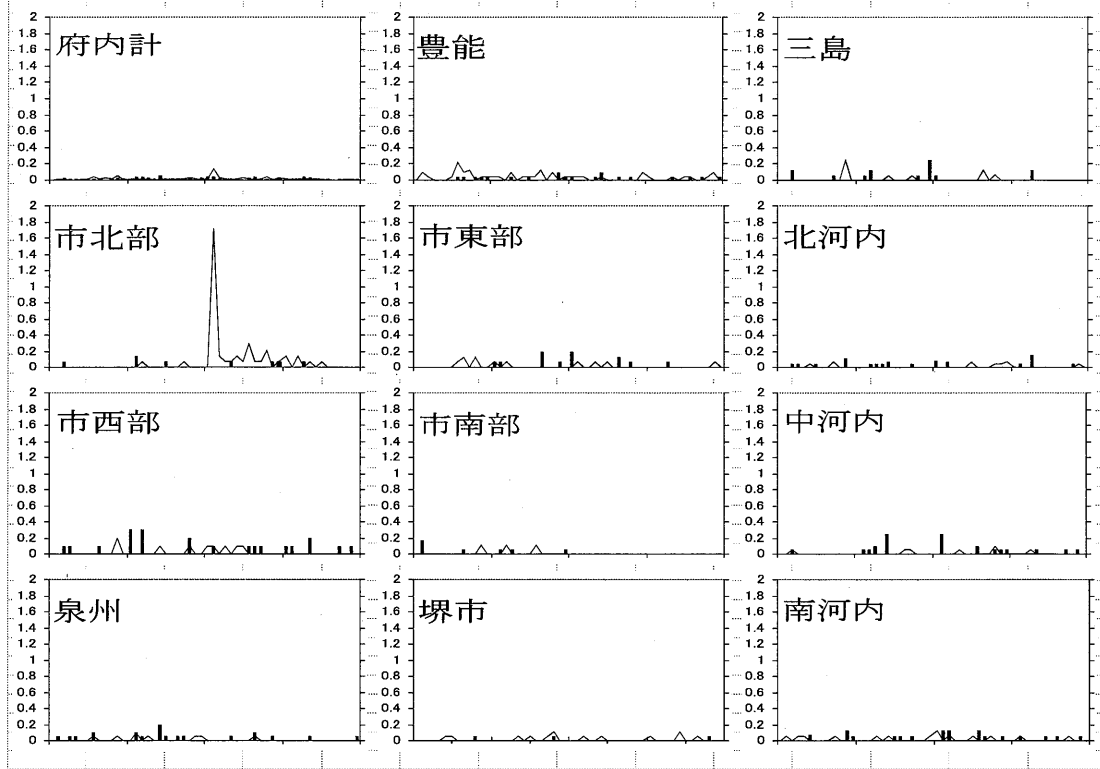
ブロック別で報告数の多かったのは、⑤中河内23例、③北河内22例、⑨大阪市西部21例、①豊能20例で、少なかったのは、⑥堺市3例、⑪大阪市南部7例、⑧大阪市北部8例であった。

（文責：森定）

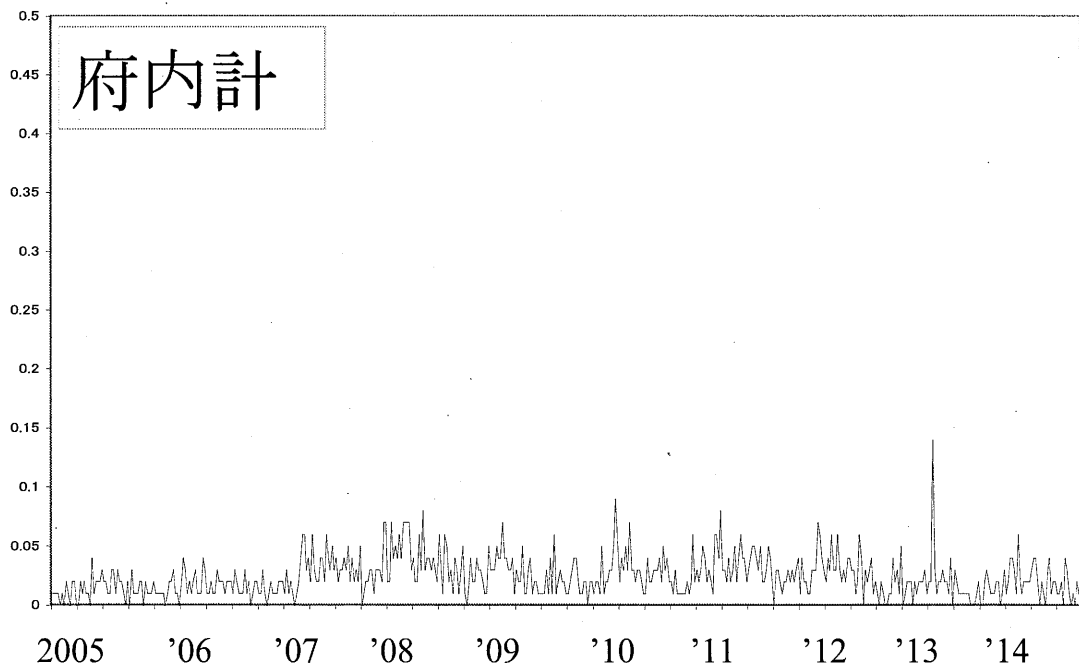
百日咳

線（H25年第1週～第52週）

棒（H26年第1週～第52週）



線（H17年第1週～H26年第52週）



### ●ヘルパンギーナ

平成26年と平成25年の患者報告数の比較では、平成26年の報告数は前年比29.4%増の9,704例で、総報告数の7.2%を占めた。定点あたりの報告数の年平均は0.94で順位は昨年の第6位から4位になった。

全国的には4位(0.84)であった。

週別(月別)の定点あたりの報告数の推移では、週別では第1週から第19週までは0.01～0.1で推移し、第20週(5月)に0.2となり以後増加し、第28週(7.04)、第29週(8.75)(7月)にピークとなった。第35週(8月)に1.0を切り0.84となり減少が続いた。第24週(6月)に報告疾患の第4位になり、第28～31週(7月)に第1位となった。第36週の第5位を最後に上位5疾患から外れた。

全国的には0.17となった第20週(5月)から増加が始まり、第25週には1.0を超え、第29週(4.97)、第30週(4.14)、第31週(4.4)(7月)にピークに達した。以後減少し、第38週(9月)には1.0を切った。第29～32週(7月～8月)に報告疾患の第1位となった。

年齢別患者発生数では、1歳2,513例(25.9%)、2歳1,834例(18.9%)、3歳1,417例(14.6%)、4歳1,132例(11.7%)、0歳878例(9.0%)の順で、0～4歳で全体の80.1%を占めた。

ブロック別患者発生数では、定点あたりのブロック別年平均報告数の上位5ブロックは、③北河内(1.61)、⑧大阪市北部(1.54)、④中河内(1.15)、①豊能(0.9)、⑤南河内(0.9)の順であった。

ブロック別・週別定点あたりの報告数の上位5ブロックは、③北河内(第29週、15.81)、⑧大阪市北部(第29週、13.43)、③北河内(第28週、13.41)、⑧大阪市北部(第28週、12.57)、①豊能(第29週、11.30)の順であった。

### 病原体情報

病原体検出の陽性率は72.1%であった。コクサッキーA10型、A2型、A4型、A5型、B4型、エコー11型、EV71型、単純ヘルペス1型、パレコ、パラインフルエンザ、ライノウイルスが検出された。

本疾患は6月末から7月にかけて流行の急峻な単峰性ピークを示す夏型感染症である。今年の流行は昨年と同様の比較的典型的な流行パターンであった。

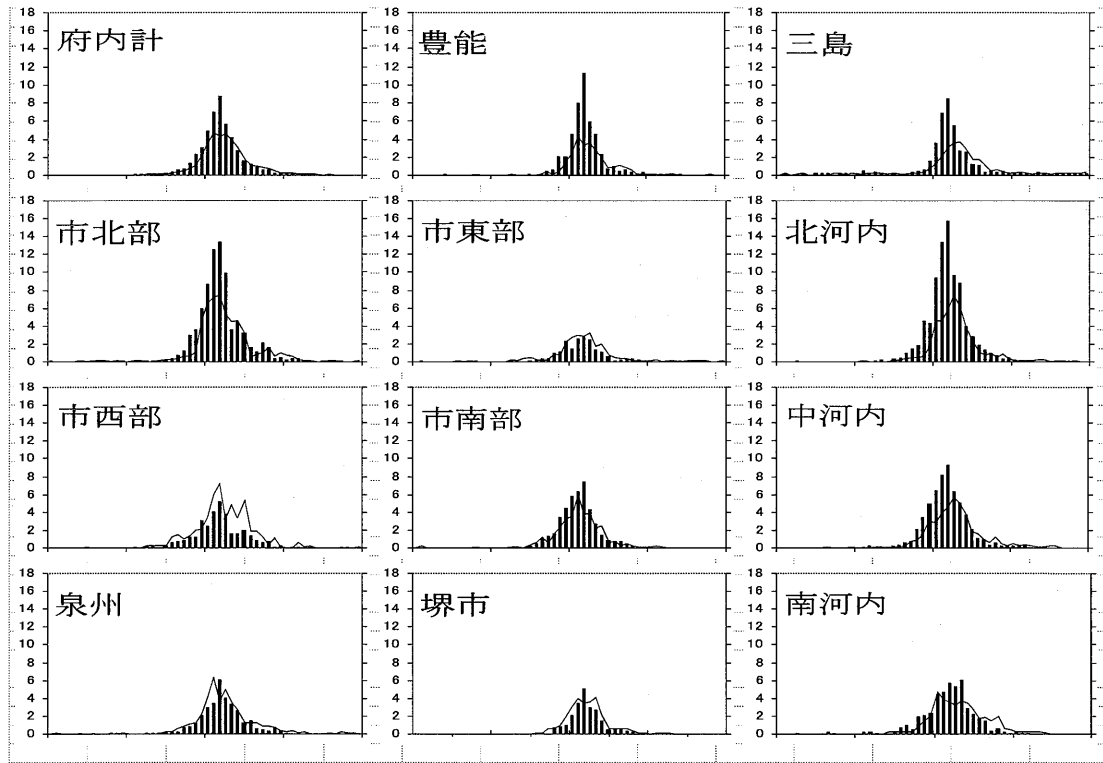
一方、⑨大阪市西部では9月になっても定点あたり1.0を超え、流行の終息が遷延した。

(文責：東野)

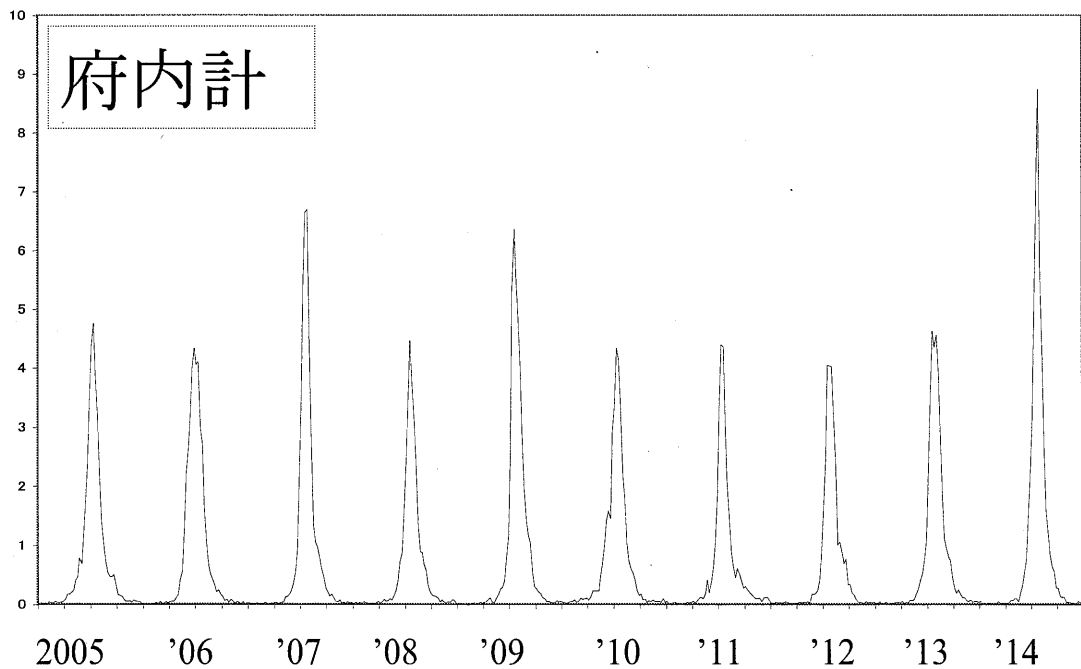
ヘルパンギーナ

線 (H25年第1週～第52週)

棒 (H26年第1週～第52週)



線 (H17年第1週～H26年第52週)





●流行性耳下腺炎

平成26年の患者報告数は前年比21.7%増の1,721例で、総報告数の1.3%を占めた。定点あたりの報告数の年平均は0.17で、順位は昨年同様の第9位であった。3年連続で減少を続けていたが、昨年は増加に転じた。

全国集計でも同様の傾向を示し、報告数は前年比13.0%増と増加した。定点あたりの報告数の年平均は0.28で、順位は昨年(0.14)同様の第9位であった。

週別(月別)の定点あたりの報告数の推移をみると、第26週(6月)の0.32がピーク値であった。夏季にやや多い傾向があったが、年間を通して大きな変動はなかった。全国的には第27週(6月)の0.40がピーク値であった。

年齢別患者発生数では5歳児の323例が最も多く、以下、4歳児(304例)、6歳児(209例)、3歳児(203例)と続き、3歳児から6歳児で全体の60.4%を占めた。

定点あたりの報告数年平均の上位5ブロックは、⑤南河内(0.47)、④中河内(0.29)、⑨大阪市西部(0.19)、⑪大阪市南部(0.18)、③北河内・⑧大阪市北部(0.16)の順であった。

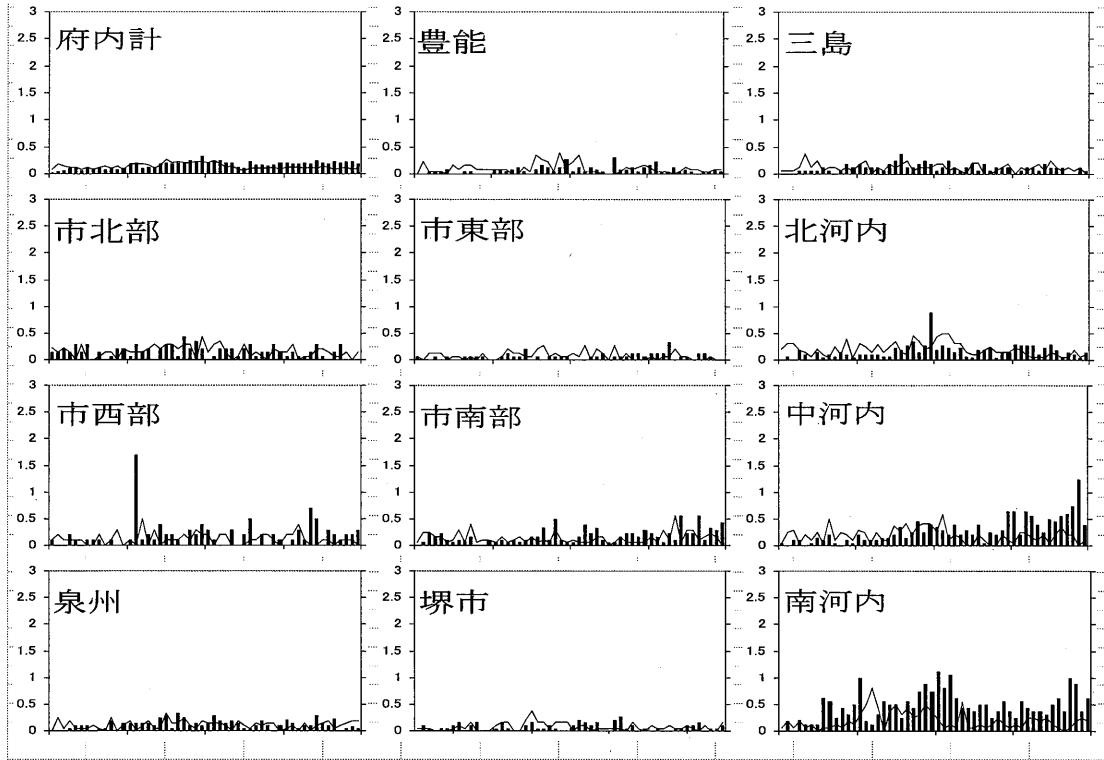
ブロック別・週別定点あたりの報告数の上位5ブロックは、⑨大阪市西部(第15週、1.70)、④中河内(第51週、1.25)、⑤南河内(第27週、1.13)、⑤南河内(第29週、1.06)、⑤南河内(第14・49週、1.00)の順であった。

(文責：八木)

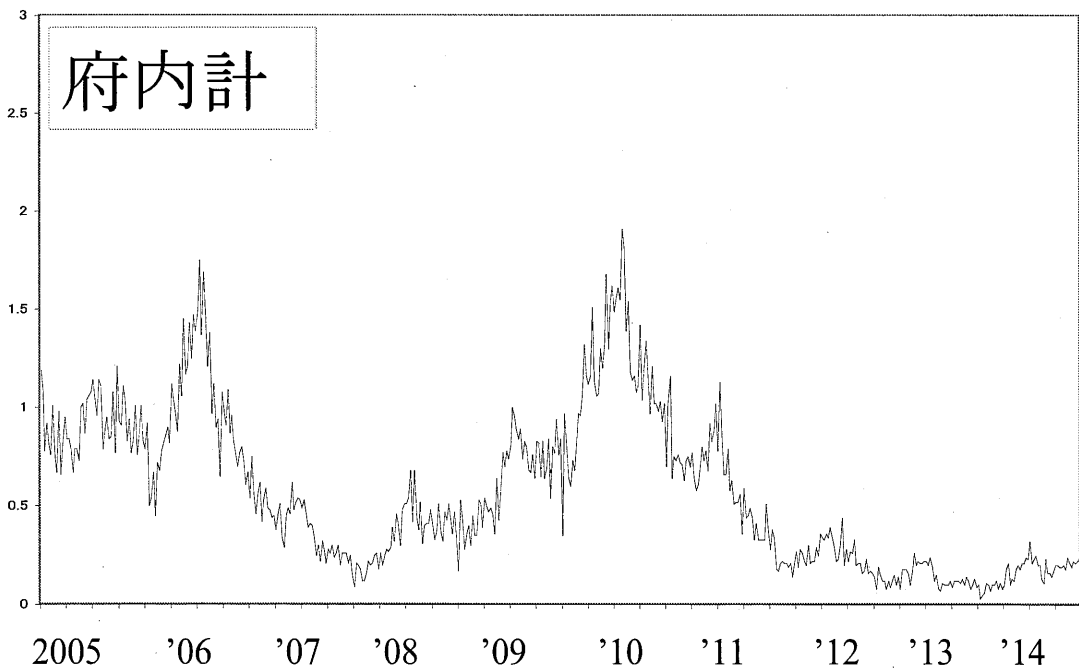
# 流行性耳下腺炎

線 (H25年第1週～第52週)

棒 (H26年第1週～第52週)



線 (H17年第1週～H26年第52週)



### 3) 眼科定点把握疾患

#### ●急性出血性結膜炎

平成26年の急性出血性結膜炎の報告数は、27例で前年より5例増加し、一定点眼科医療機関あたり0.01であった。

週別発生状況では、府内合計で定点あたり最高が、第32週の0.06(3例)で、次いで、第12週、第13週、第18週が0.04(2例)であった。報告の無い週が34週あった。

年間平均ブロック別では、②三島が0.04で最も高く、⑦泉州、⑧大阪市北部の0.02がこれに続いた。④中河内、⑤南河内、⑨大阪市西部、⑩大阪市東部からの報告はなかった。

年齢別では、本疾患も流行性角結膜炎と同様に例年成人の発生が多く、20歳以上の報告数が20例と、全体の74.1%を占めた。

最近5年間の一眼科定点あたりの急性出血性結膜炎発生例件数

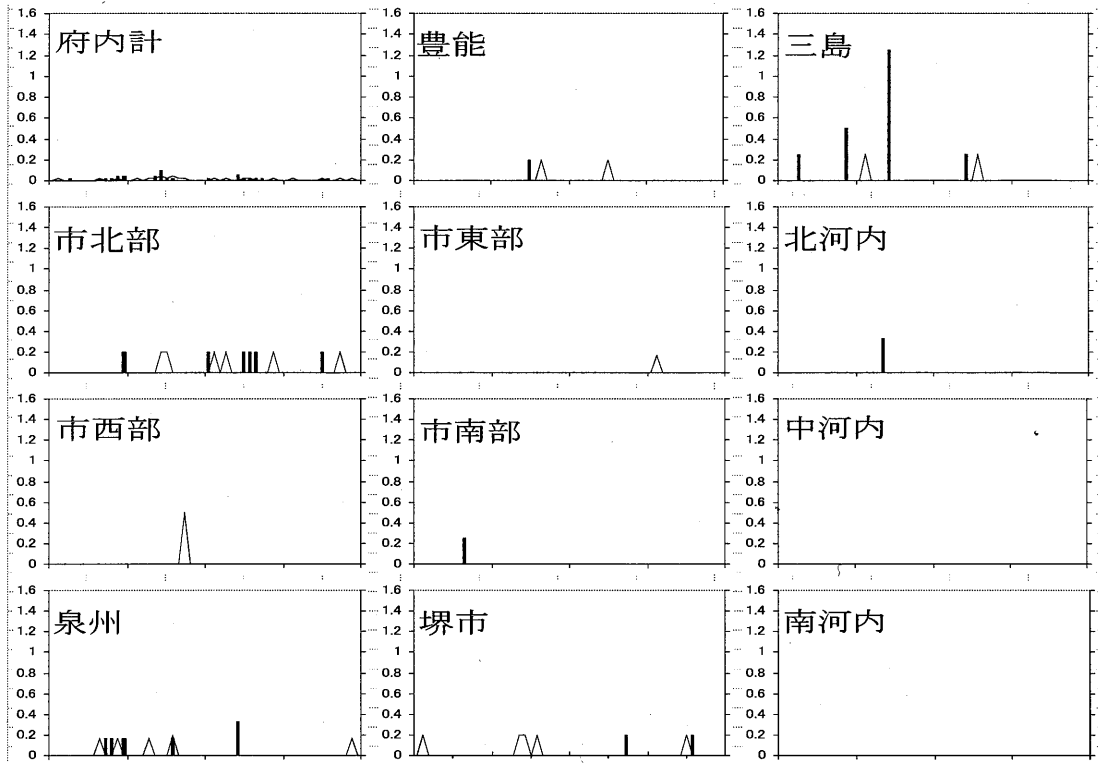
	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年
大阪	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01
全国	0.02	0.13	0.01	0.02	0.01

(文責 笹部)

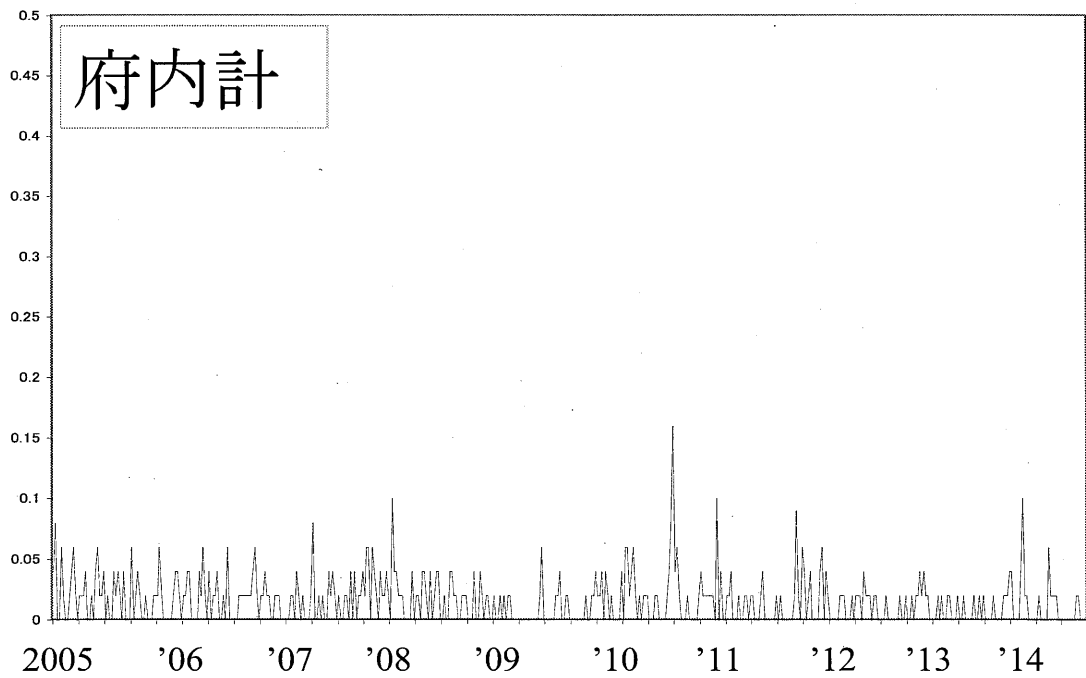
急性出血性結膜炎

線（H25年第1週～第52週）

棒（H26年第1週～第52週）



線（H17年第1週～H26年第52週）



●流行性角結膜炎

平成26年の流行性角結膜炎の報告数は前年の21.4%減の758例で、一定点眼科医療機関あたり0.28であった。

週別発生状況では、府内合計で最も報告数の多かったのは、第2週の定点あたり0.67で、第34週の0.50がこれに続き、以下、第26週が0.46、第35週と第49週が0.44、第36週が0.42であった。本疾患は夏型感染症とされているが、発生件数が少ないとその傾向は、目立たなくなる。本年は、第27週から第40週までの(7月～9月)14週間に全体の30%の報告だったが、前年の39%からは減少した。

週別ブロック別では、⑥堺市第2週の2.6が最も高く、⑪大阪市南部第50週の2.5、②三島第34週の2.0、⑤南河内第40週、⑪大阪市南部第28週の1.75、②三島第2週、第37週、⑨大阪市西部第6週、⑪大阪市南部第49週の1.5が続いた。

年間平均ブロック別では、②三島が0.44と第1位で、次いで、⑥堺市0.35、⑪大阪市南部0.33の順であった。最低は、③北河内の0.18であった。

年齢別では、例年どおり成人(20才以上)の発生件数が多く、本年も525例と全体の69.3%を占めた。

本年も、大阪府内の定点あたりの報告数は、全国集計よりも低かった。

最近5年間の一眼科定点あたり流行性角結膜炎発生例数

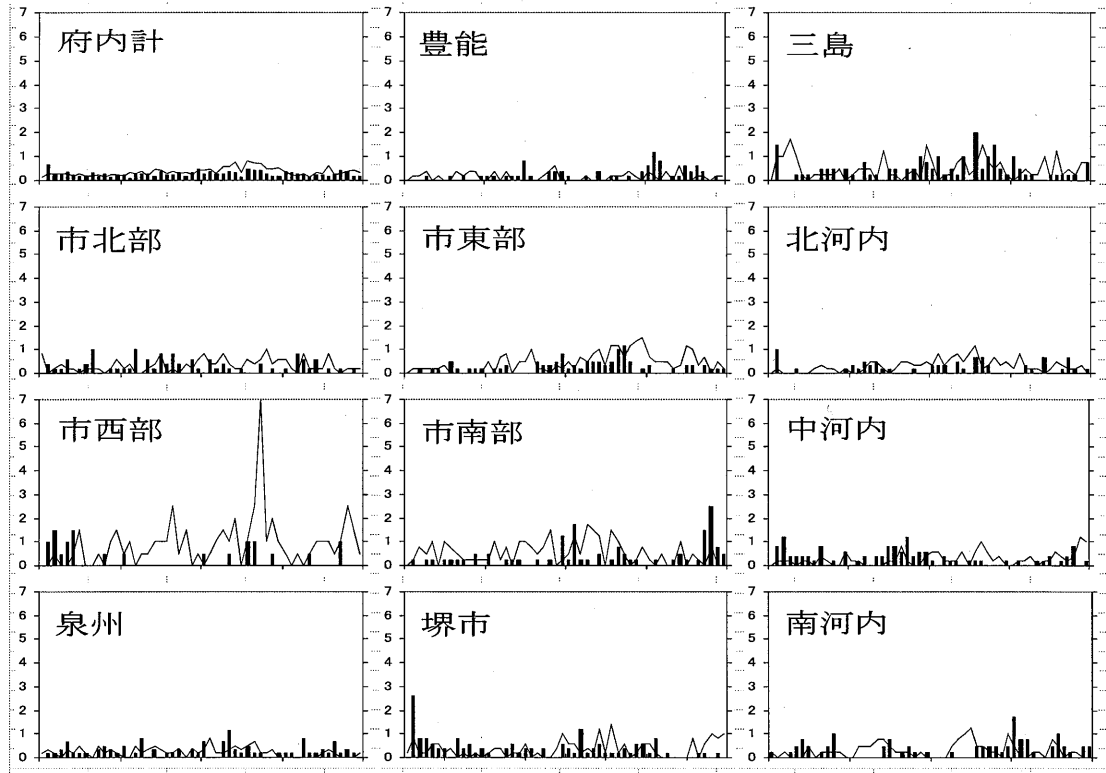
	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年
大阪府	0.42	0.30	0.23	0.36	0.28
全国	0.62	0.60	0.56	0.58	0.57

(文責 笹部)

### 流行性角結膜炎

線（H25年第1週～第52週）

棒（H26年第1週～第52週）



線（H17年第1週～H26年第52週）

